

03 銀座煉瓦街

明治5(1872)年に、現在の大手町から銀座京橋付近で大火が起こり、甚大な被害が生じました。大火後まもなく、明治政府は、銀座を西洋化の象徴として煉瓦街に改造する計画を定めるものとし、不燃都市化すべき布告を出しました。東京府を事業主、大蔵省を監督官庁として、焼失跡地に煉瓦街を建設する事業が進められ、明治10(1877)年に完成しました。

銀座煉瓦街の計画は、馬車走行に対応した道路、ガス灯や街路樹の整備、道路幅員に応じた建物高さの規定など、新しい空間のつくり方を提示し、これまでの日本にない西洋的な街並みを出現させました。完成時には空き家も目立ちましたが、次第に文明開化を象徴する街として人気を博すようになり、新たな商業地としての地位を確立していきました。



大火による被害の範囲

瓦版「明治五年二月二十六日銀座大火」
ギンザのサエグサ文化事業所蔵
明治5(1872)年に、現在の大手町から銀座京橋付近で、焼失町数34町、焼失戸数2,926戸に及ぶ大火が起こりました。東京では煉瓦造の建築が建てられ始めていたものの、都市全体としては、狭い道路と木造の建物が並ぶ旧態依然の街並みが残り、毎年のように火事が発生していました。



車道と歩道が分離された道路

明治10(1877)年頃
New York Public Library蔵
銀座煉瓦街では道路に3つの等級が設定され、等級に合わせて道路に接する建物の高さも規定されました。また、東京の市街地では馬車の走行が始まっていたため、車道と歩道の分離も併せて計画され、歩車道の境には街路樹が植えられました。



銀座煉瓦街の街並み 明治21(1888)年 「東京銀座通煉化石造真図」中央区立京橋図書館蔵

街並みのデザインの統一が図られ、建物の2階前面からバルコニーが張り出し、その下部には列柱が並ぶ歩廊(アーケード)が造られました。建築の構造に関しては、地域の建物すべてを煉瓦造とすることが計画されましたが、新技術であった煉瓦造はコストが高かったこともあり、煉瓦造・石造の建物は全体の4割程度に留まり、残りは塗屋造(ぬりやづくり:外壁を漆喰で塗ることで防火された建物)・蔵造・木造でした。明治10年代から大正初期まで、銀座の街路樹のほとんどが柳でした。



明治12(1879)年頃の銀座通り

銀座・日本橋のガス灯 「東京名所図会銀座通煉瓦造」郵政博物館蔵
東京市のガス灯整備は、明治7(1874)年に銀座通りの東京会議所から始まりました。その後、ガス事業の民間払い下げにより、明治18(1885)年に東京瓦斯会社(現在の東京ガス)が払い受けました。



現在の銀座通り

銀座は明治以降現在に至るまで、繁華街として発展してきました。また、昭和45(1970)年8月2日に銀座通りで都内では初めての歩行者天国が実施されました。現在では毎週休日に行われ、多くの人々にぎわっています。